

大学におけるスポーツの人間学的意義について

福岡, 孝純 / Fukuoka, Takazumi

(出版者 / Publisher)

法政大学体育研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育研究センター紀要 / 法政大学体育研究センター紀要

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

1993-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004910>

〔大学におけるスポーツの人間学的意義について〕

福岡 孝純

はじめに《問題提起》

ハイテク、ハイタッチの進行により技術文明は、一層の進展を見せている。そしてこれらの技術文明は、いわゆる技術環境という形式で私達の生活に密接なかかわりを有している。

この技術環境を支える企業集団や公共団体は、ますます日常生活における影響力を深め今や私達の生活は、技術環境により具現化、成立しているかのような錯覚すら覚える。

技術環境の特性は、それが物質的であり、物質・エネルギー、情報の操作、処理、構成により、私達人間の外部に四次元の機能的空間を構築するところにある。

技術環境は、人間に、利便、機能、安全、快適などさまざまな寄与をもたらし、その恩恵は大変大きなものがある。しかしながらその一面で、この技術環境は自然破壊や環境汚染をもたらし、今、私達の地球は危機的な状況にある。それとともに、技術環境はその特性により人間疎外をもたらし、人間の物質的、機能的側面重視により、精神世界の大幅な衰退と空洞化をまねきつつあるのだ。

これは、技術文明がその本質に次の四つの特性を有している所にある。すなわち

1) 動的で機能追求の社会である。

私達の物質的社会は本来心象で考えた(時間的な)ものを、外部に空間的に創出する(外挿、アウトター・トレンド)という、いわゆる時間—空間変換を本質とするが、それは機能追求を第一義としている。これは哲学的には「実体を捨象して機能を抽象する」といった考え方である。

私達は知らず知らずのうちにこの機能主義に立ち、そのものが役に立つ間だけそれを利用するという考え方を普遍化させ、これを人間社会の中にもごく当たり前のものとして取り入れるに至っている。

2) プロセス(過程)よりも結果(アウトプット)を重視する。

技術開発では、プロセスよりもアウトプットが重要である。結果さえ希望するものが正しく出ればよしとする所がある。(例・インスタントコーヒー、ロープウェイによる登山)

これは技術的抽象といわれるものである。しかし、人間はひとつの目的を目指しての試行錯誤や地味な一步一步積み重ねる営み、特にひとつの目的に向かって耐え忍んだり、協力して行くことにより人間的な徳が養われると言って良い。つまり「技術は時間を節約して機能、目的が限定された空間をつくり出す」のが本質であるのに対して、「人間の本来の意識(こころ)は時間性」なのである。これを誤解して、本来苦勞して得てこそ意味のある結果としての効果を安易に

即座に手に入れようとすることが多い」。例えば、男女間の愛であっても、相互の努力によって築き上げてゆかなければならない人間のモラルがあることも忘れ、結果としての輝きや喜びといった側面のみを重視し、結果的に時間性としての意識（こころ）が縮み、虚無化するといった傾向がでてきた。技術文明がもたらしたものは宿命的ともいえる心が滅びた、愛不在の社会である。相変わらず戦争、殺人、詐欺などが今迄よりも更に残虐でかつ狡猾な形で横行している事実はこのことを示している。

3) 価値の論理から力の論理へ

現代は目的や価値の論理から、手段や力の論理への移行が特色といえる。かつて私達は、人間には自明の課題を有していた。例えば、医者が病人を治すとか、政治家にとりよい政治をしようというのは考えるまでもなく明らかであった。人間は人生の目的にとり、どれが良い手段かを考えて目的を達成するために力を尽くした。つまり自分の内面を純化し鍛え抜いていったのである。ところが現代ではそこに技術が介入する。例えば、原子力とか電力があれば、それをいかに効果的に使うかということに、心をくだかなければならないのである。したがって、技術環境にかかわる仕事をしている人間は、もはや物理的以外の目的、すなわち純粋に人間の内面的、超越的な目的を探る可能性は、きわめて少ないということの意味する。これは、愛のように純粋に個的で人間的な価値を生涯の目的にする習慣とか重要視する意識を副次的にし、また、古典的な倫理学では個々の人間が主体であった行動主体が人類、組織（団体、委員会）など、非人称的なものへと変化している。したがって、個人の人格、責任、決断にかかわる愛のようなものは、縮退して、それが単なる性的な結合や生理学的な次元でのみ考えられてゆく傾向にある。つまり人間は技術文明により非人間的な動物状態にもどってしまう危険性が考えられる。

4) 技術は出会いと確かめの場を提供する

交通機関の発達、情報化（TV、電話、ファックスなど）は、人間の出会いと交流の場を提供しコミュニケーションと、確かめの機会を大幅に増した。反面で唯一回性という緊張感を失ったということもある。また、虚無体験（情報化による）は真実の愛の緊張力を弱めた。つまり真実の人間関係を技術環境との接触の枠内で軽く考えてしまい、その深さを失うことが発生する。

このように、技術には「時間を節約して、機能、目的が限定された空間を構成する」特性があるのに対して、「人間の本来の意識（こころ）は時間性である」という基本的な差異を私達は知る必要がある。

したがって、技術化が進展し社会が効率的になればなるほど人間は、自由時間やその他の時間で技術環境（機械）のためではなく、純粋に人間のために時間を費す必要がある。心の縮まり現象に

対応するためにも人間のための時間が必要である。

人間というものは頭（知性、知識）だけでは生きられない。人間には心（精神、魂）がなければ生きられない。よかれと思ってその発達をはかって来た経済、政治、社会機構がかえって人間をがんにがらめにし、数々の文明の利器が逆に人間を振り回し、人間（主人）と技術（奴隷）の状態が逆転した状況を、人間疎外（エイリネーション）という。私達は現代技術文明が根源的に有するこの問題から決して目をそむけてはならないのである。この環境破壊や人間疎外さえもたらず技術環境を私達が今後どのようなものとし、どのような社会構造や生活環境、生活様式を構成して行くかということは、21世紀までもはや7年と迫った私達人類の大きな課題なのである。21世紀の大学教育がいかにあるべきかということは、このような前提条件においてのみ考えられるものなのである。

○ 大学教育の指向すべきもの

現代における大学は概略次の三つの機能を有するものと考えられる。

- 1) 伝統的な学術文化を継承・保存すると共に現代の科学、技術を再生産、創造する。
- 2) 専門的技能や理論を継承、開発すると共に専門職業従事者（プロフェッション集団、医師、技師、法曹、教師など）を継承的に育成すること。
- 3) 教養教育、専門教育を通じて自然、人間、社会に関する教養を普及し、職業的技能・知識を育成し市民性を形成すること。将来健全な市民社会を構成してゆく人格を自己形成しうる基盤としての時空間を提供すること。

しかしながら、現実には技術文明の進展により、技術環境の下支えする企業集団や公共団体は、ますますその日常生活における影響力を深めている。そして、技術環境のより一層の量的及び質的拡大に資する産業育成こそが国家目標であるとして、いわゆる生産優先の社会構造へと一層の傾斜を深めつつある。そして、これらの技術環境を構成する企業や公共団体の要望に応えることが、あたかも今日の大学教育の本義であるとするような近視眼的な意見が財界などから発せられている。そして、企業の要望に対して、唯唯諾々として従うことがあたかも今日の大学教育のとるべき道かのような意見もある。

もう一方で、大学の極めて閉鎖的で密室的な本質、旧態依然としたカリキュラムや研究体制、更に人事、組織、能力や業績評価システムが大きな問題となりつつある。そうした中で、学生達は将来の就職のためのパスポートとして大学を位置づけ、有名大学はあたかも一流企業あるいは公共団体へと入社もしくは入所（省）するための予備校的なものとして考えているという事実がある。それと共に学生にとり大学は、モラトリアム社会でもある。将来の社会参加への猶予期間として、学生はサークル活動やレジャー活動を楽しみ、また学費、レジャー活動費拮据のためのアルバイトに多忙に過ごしているといった状況である。そして全能感を持つことこそあれ、常に社会継承者とはスタンスをおくトレンドがある。こうした状況で大学は今そのアイデンティ

ティーをまさに問われているとって良いであろう。

そこで、根本に立ちかえり考えると、技術文明以前に私達人間はすでに社会を形成し、その中で高度の精神文化を形成して来たという事実があることをまず確認する必要がある。人類には長い歴史があり、すでに旧くから高度な文明が存在していたのである。宇宙論的な立場で見ると、生命体としての人間が発生して現在のような社会生活を営むようになるまでには、約150億年がビッグバンから経過しているといわれるが、これには進化論的に見て次のような段階があったと考えられる。

1. 原子の世界：アトモスフェア (atmosphere)

物質は基本的に粒子と反粒子から構成されており、これらが結合すると空となる。現在の物質はビッグバン以来の宇宙に残されたわずかの物質であるという。

2. 水の世界：ハイドロスフェア (hydrosphere)

水惑星地球は太陽系の三番目の惑星で、水が水、氷、水蒸気の三つの相が相遷移が可能の形で存在している。これは極めて稀な状況である。この状態から現在の状況まで地球は変化した。

3. 無機物の世界：ゼオスフェア (geosphere)

無機物の物質的、原子的世界から無機物の変化世界である。ゼオスフェアが開けた。それはやがて有機物の世界へとつながってくる。

4. 生物の世界：バイオスフェア (biosphere)

有機的生命の世界が発生して来た。そして沢山の生物が地球上に出現した。

5. 精神（心）の世界：ヌースフェア (noosphere)

人間が登場し、心霊、人格の世界が発展してきた。ここまで発達したのは生物の中で人類のみである。

6. 技術環境の世界：テクノスフェア (tecnosphere)

人間は遺伝子の外部メモリーとして機械及びコンピュータなどから構成される技術環境を構築した。これは人間にはかりしれない寄与をもたらしたが、同時に人間の内面的精神の空洞化や退化、物質至上主義のような弊害をもたらすと共に、環境破壊などにより地球をおびやかす状況も発生して来た。

このような遷移は、ティヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin, 1881~1955) 等により初めて主張され、現在では私達のほとんどが認めている事実である。

要は人間は、根源的に宇宙の一部であるということ（東洋哲学では天地同根、万物一体ということ）である。それと共に生物の中では、人間のみが高度に精神的な世界を構築することが出来たということ、また人間が構築した技術環境がその未完成、欠点により地球環境を危機的状況に陥ししていることを私達は知らねばならない。

シャルダンは、人間はさらに発達すべきだと考え、「個々の人間は、自由な接近と共同の働きを

重ね、次第にひとつの全体的意識に包みこまれて地球的規模の単一体をつくり、いわゆる超人間が出現するであろう」とまで予言している。現代では技術文明の助けを借りて、技術環境を人間の外部メモリーとして活用し、インフラストラクチャーとして利用すればいみじくもこれが可能である。シャルダンの予言は的中した。ここで問題になるのが技術環境と地球環境との調和的共生である。この前提条件なくして技術環境に将来はない。私達は新しい概念である環境倫理的視点に立って、人間及び自然と共生できる技術環境の創出に今こそ取り組むべき時なのである。

それには人間とは何か、技術とは何か、自然とは何か、ということについて正しい認識が必要なのである。シャルダンは人間にとって精神世界がいかに重要であるかということを主張したのである。

しかし現実の世界では、人間は環境との調和が未達成の技術文明にどっぷりつかり、問題提起があるにもかかわらず環境破壊についての厳しい認識を有していない。また、経済システムについて考えても、相変わらず需要と供給を原則とする市場経済の原則が基本的には支配しており、技術環境の展開、発達による市場開発が主体となっている。

物質的な利便性、快適性、機能性のみを追いかける傾向は、ハードからソフトへと商品開発の力点が移ったにせよ、産業革命以来依然として続いているトレンドである。技術化、機械化、情報化により筋肉労働、頭脳労働から解放され、これが技術環境にとってかわられつつあるが、情報化の爆発的な発達は人間生活を機能的な情報刺激受身応答型のパターン、また、画一的受身的な消費文明社会へと変化させつつある。

このような状況で人間の精神的レベルは、昔にくらべて必ずしも進歩したわけではないといわれる。確かに多くの人々が情報化により、知識、情報を享受しうようになったが、これらはどちらかというと、知覚 (cognition) のレベルであり、より深い知性である智慧 (Wisdom) や生命に浸透する知性であるメディテーション (meditation) や黙想 (contemplation) のような人間の本質にせまるような精神空間の構築には必ずしも寄与していないといつて良いであろう。

21世紀を目前にひかえる私達は どうしたらこの地球環境を破壊しないで人間が生きぬき、より高度な文明を構築することが出来るか？ ということに今ほど真剣に考える必要性に迫られている時はない。新しい価値観の枠組 (パラダイム) は、

1. 環境倫理的視点に立つ

自然・人間・技術、それぞれとの共生共存を原則として考える。それには政治・経済・文化それぞれの分野でも全てエコロジーという視点が必要となる。

2. 人間学的視点に立つ

宇宙物理学者ホーキングは、「我々が宇宙をして認識しているものは我々人間が認識する範囲の宇宙である。」と述べたが、私達がより高度の文明を構築しようとすればするほど私

達人間自身が物事をより根源的に見て神に近づくことが必要になってくる。このような考え方を「人間原理」と呼ぶが、認識するもの、つまり知性を持った生命こそが宇宙の中心であるということができるのだ。これを、宇宙論的ヒューマニズムとっている。そしてより深く宇宙そして人間を知ることにより、人間はより高度な文明を構築することができるのだ。

3. エコテクノロジーの展開とAIからALへのアプローチ

技術環境の発達にあたりエコロジー的視点が常に必要なとなる。その究極のパターンとして、AI（人工知能）からAL（人工生命）へのアプローチがどうしても必要となってくる。これらが可能となり初めて技術環境は自然環境との調和が可能となろう。つまり、人間の遺伝子と脳の共生が可能となるのである。

4. グローバル・エコノミクスの視点

地球はひとつの生命体である。という「ガイア仮説」がラブロックにより提唱されたが、経済の分野でもグローバルな見方が必須となっている。例えば、経済学を考える場合、今日ではもはや生態学的なアプローチや文明論的なアプローチを無視するわけにはゆかない。これら全てを包括した生命系のエコノミーとして、条件づけられた社会科学として考えてゆくことが必要になるのである。つまり、アダム・スミス、カール・マルクス、ジョン・メイナード・ケインズを踏まえた上で、グローバルな視点で政治、社会、文化を包括した経済システムが考えられる必要がある。その究極の目的は、量ではなく質の価値論を重視した経済学といえよう。当然のことながら経済、政治、文化を包括して成立する経営学もグローバル・マネージメントという視点をもたなければならない。

このようなパラダイムを仮にコスモロジー（宇宙主義）と呼称するとすれば、私達は、現実レベルでは戦術的、対症療法的な処理をとるにせよ、人類の将来を考えた場合、どうしてもコスモロジー的価値観を有することが必要になってくる。

これからの大学教育に求められているもの、それはモラトリウム期にある青少年に対して、ただいたずらにその全能感や快楽主義を容認することも、また半人前意識や修業感覚を強調するような、いわゆる社会の継承者に対して無批判で近づく態度、すなわち新しいモラリアムと古典的モラリアムの態度（エリクソンによる）の双方共に誤っているといつて良い。

重要なのは、宇宙論による人間原理にのっとり、私達人間とは何か、そして人類の目指すものは何かについて、文明論的、及び文化論的視点で見られる人格（パーソナリティ）をまず高等教育を受ける前のレディネスとして形成させて行く必要性である。〇〇のための人格ではなく、全き生命体としての人間性の自発的発見、人間の精神世界への目をひらかせることが、まず第一に求められているのではないだろうか？

○ 現代におけるスポーツの意義と役割について、特に大学教育における位置づけについて

すでに情報化社会で日常生活が情報刺激受身型、情報処理型となり、人間の特定の機能が職場や学校で問われるようになって久しい。しかし、人間は全人格的な存在であり、人間の日常生活における満足感は単に、生理的、物質的な満足感ではなく、自己実現、自己創造や連帯意識の獲得、あるいは達成にあることは論を待たない。

スポーツ・フォア・オール運動こそ実は人間がいつでも誰でも、自らの希求する形式でスポーツを行い、スポーツ活動というミクロ・コスモス（コズム）で人間性（ヒューマニティー）を見出し、体験する場であった。佐伯^{*}はこれについて欲求の位相から文化の位相への展開として、文化としてのスポーツこそヒューマニティーを啓発するスポーツであると述べている。

私達は、技術環境の影響で人間疎外に陥っている人間がスポーツを行うことにより、まず身体的教養＝スポーツ・ヒューマニティーを得ることが必要であると考ええるものである。

人間が人格を形成する要素として東洋哲学では知・徳・体といい、特に王陽明（1472～1528）は強く知行合一を説いている。そして、その本質として

「至善（絶対的な理想）の理をわが心にだけ求めるなら、天下の事物の理を究め尽くすことができないのではないのでしょうか」という弟子の徐愛の問に対して

「心がすなわち理である。この心をおいてほかにどんな事物があり、どんな理があるというのか」と答え、心即理、つまり人間の心こそ万物の主宰者であるとしている。

これこそ現代の宇宙論における人間原理を示唆するものであり、私達のこれからの価値観であるコスモロジーの中核をなす理念であろう。

大学における知性教育や技能教育はむろん重要であるが、これらは歴史的に見ると、人間性にとって付加的な価値（software）であり、本質的な価値ではない。技術文明の存在する、はるか2000年から2500年も前に、孔子や孟子、そして釈迦、キリストは出現しており、高度な精神的世界を開いている。私達はいよいよ先鋭化、分化する科学のトレンドの中でこれらを重要視すると共に、これら科学の恩恵を享受する母体である人間自身についても目を向け、これからの技術文明の一層の発展をはかるためにも健全なる人格の形成を人間学的視点に立って行うべきである。

生命（いのち）、情熱、風格、安心、立命（志）のような本質的価値が追及されねばならない。付加的価値として、主として大脳の新皮質が関与する「いかにうまく生きるか？」といった知識、技能の習得のみならず、何故生きるか、どのように感じて生きるか、といった心や感性を含めた全人的な人格形成が必要とされるのだ。

今までのIQや偏差値のような価値観（インディケーター）に加えて、広義の倫理、道徳（way of environment, way of lifeのprincipleやregulation）についても理解させ、とすると閉鎖的な全能感に陥りやすい青少年に、自然と人間、人間と人間、自分の心（深層）そして、技術環境とも対話の出来る、いわゆる環境倫理的な観方を可能とする教育や自己形成の場が必要である。

*）佐伯聡夫（筑波大学）

ここで重要となってくるのは、知行合一（思考と行動の一致した）生活態度や行動であるが、ミクロコスモスとしてのスポーツ活動には、自己実現活動としてのライヴな体験の中でこれを具現化してゆくことができる。

すなわち、スポーツは、その保有している特性により自己解放、自己制御、自己実現等の要素を行動における語り（思考）と振り（動作、演技）の一致の中で自然に行ない、知らず知らずのうちにセルフコントロールからセルフリアライゼーションが可能となるからである。

つまり、全能感から、アイデンティティーを失いつつある青少年に対して、自己を自我分裂により、客観的に冷静に見ることを可能にするのである。

ここで、現代におけるスポーツ活動の意義と役割をまとめると、個的な領域では、

① 自己実現活動（体験活動）

機能化、分業化、専門化、標準化、画一化が進む生活形態の中で全人格の関与する活動として、自己実現が可能な活動である。

② 自己創造活動

より高品質な自己存在を目指し、自己創造を目指す全人的活動

③ 健康体力づくり活動

フィットネスからウェルネスの獲得と、よりヘルシーな自己パフォーマンスを目指す行動

④ 生物として生きる継続的意志と、ヴァイタリティーを涵養する行動としてのスポーツ

⑤ 自己の身心の自発的制御能力の向上（力の行使と制限）と異環境への適応能力の向上、自分の思った通りに自分の身心をコントロール

⑥ 極限状態での精神集中能力

人間の体力の極限的状況下での、精神集中における自己貫徹と最適値制御の実現（コンセントレーション能力）

⑦ 自己の行動（未知な領域を含む）に対する自己信頼能力

自己の行動を信頼し、たとえ未知の領域における行動であっても確実な予測と、冷静な態度でプログラム化された行動を実施して行く能力（self confidence, 自己信頼）などを培うことが可能である。自己投企による勇気を有する思い切った行動をおこし、実施する能力は、快適な環境に慣れた現代の青少年にとり貴重な体験の場でもある。

次に、チーム（グループ）における人間関係がある。この領域は、

① フェア・プレイ

正々堂々と行動し、ルールに則り、フェアに振る舞う

② チーム・ワークとロール・プレイング

one for all, all for one というように、task（課題）に対してチームで一丸となって対応して

行くことを学ぶ。そして与えられた役割やポジション（ロール）をこなす、いわゆるロール・プレイングをしてトランス・パーソナルなフィーリングを持ち、相手の気持を理解しながら、共に存在し、共に生きること、そして課題に対してベストを尽くして努力して行くことを学ぶ、いわゆるシンバイオシスという感覚もこのような行動により理解されよう。

③ リーダーシップとフォロワーシップ

チーム・ワークとも関連するが、リーダーであると共にフォロワーであることの双方を学ぶことが出来る。

最後に対環境（自然環境や施設、用品、用具、機器）との対応であるが、

① ロール・シェアリングとハンドリング

どこまで用具や機器にまかせ、どの部分を自分で分担するかを瞬時に判断し、技術を駆使していく。

② セーフティ & アメニティ

安全に快適に環境と共にとけこんで体験行動をする。

③ セキュリティ & アドヴェンチャー（チャレンジ）

時には危険に身をさらしたり、冒険をしたりして、自己投企的活動をする。特にチャレンジ精神は環境により生じた恐怖を克服したり、耐えることにより養われる。

このようにして、ナイスピープル、ナイスコミュニケーション、ナイスネイチャー、ナイスコミュニケーション&インターフェイスということが達成される。

現在のところスポーツは、ナチュラル・リアリティーを追及するエコスポーツ（アウトドアスポーツ）と共にアーティフィシャル・リアリティー（artificial reality, 人工的リアリティー）を追及する高度に機能的なものとの双方向へと展開するトレンドが見られる。

このうち、ナチュラル・リアリティーを志向して行くスポーツでは、当然のこととして、「自然を知り、己を知る」ことから、Human（ヒューマン）in nature、あるいは共にあるといった自然と一体化した調和格合の心境（心理構造）が獲得される可能性がある。（エコロジー&シンバイオシス）これは、自然環境への愛着を通して、その保護や保全理念の形成に大きく寄与する。

これに対して、アーティフィシャル・リアリティーの場合には、最適あるいは極限の場における行動をとることにより、そのプレイを通じての高度に統合された自己実現行動の体験が可能となるのである。これは自己創造へとつながる行動といえよう。

最後にスポーツ活動の意義を高くするものとして、擬似共同体としてのスポーツクラブの役割を挙げねばならない。

ゲーテはファウストの第Ⅱ部で「ひとつの信念のもとにあつまり、運命共同体をつくってゆき、力を合わせて仲間と行動するとき、人間は至福の瞬間を味わう」と述べ、「その時こそ永遠なれと思うような時が止まって欲しい瞬間だ。」と述べている。これによりファウストはメフィストとの賭に敗

れる。しかし、人間として満たされるのである。私達がオーガナイズするスポーツクラブは、この運命共同体としての魅力を擬似的なミクロコスモスとして有しているものである。そしてこれこそ、これからの技術文明社会の中でオアシスとしての役割を果たすものと考えられる。大学においてもこのようなスポーツクラブ活動の教育学的効果は極めて大きく、良い意味のモラリアム社会の活動といえるのではないだろうか。

かつて哲学者オルテガ・イ・ガセは、
「科学上ならびに芸術上の創造、政治的ならびに道徳的英雄精神、聖者の宗教心はスポーツ本能の崇高な所産である」と述べている。

つまり、スポーツ活動は本質的には冒険、遊戯ともその心理構造では共通のものを有し、人間がいかなる義務からではなく完全に自由であり、自発的な衝動から身を投げ出す自己解放、自己実現活動なのである。

こうして考えると、冒険・遊戯スポーツは、その根源において愛と結ばれていると言ってよい。何故ならば、愛には自らを投げ出すこと、与えることによって、己が失った根源的な一体感を回復するからである。それは、大きな喜びであると共に、自らのアイデンティティが、その一体化により失われないか、という不安やおおのきも表裏一体としてあろうと考えられる。これこそ、自立と連帯という人間が生きて行く上で避けて通れない二つのものの間の張力である。このような考え方は、コスモロジー（宇宙主義）に包含されるものであるが、この自己投企的な生き方は人類の発達過程で主として人間のかくありたいという空想力（ファンタジー）の絶えまない拡大が、人間が

対 自然環境

対 人間

対 技術環境

の中で現代の文明までをも構築してきたものと、源をひとつにするものである。つまり人間の創造力の根源は、遊戯的（ファジー的、ゆらぎ的）行動にあるとあって良い。

古事記が古代の、能楽が中世の神話であるとすれば、スポーツこそ現代において最も神話性を有したものと考えて良いのではなかろうか。

現代の大学教育における人間学の根幹に、どうしてもスポーツを捉えなければならない。それは究極的にはスポーツの有しているファンタジー性（神話性、空想力）にあるのだ。

よりよき、より楽しい人生（JOY OF LIFE）にとって、このような動機づけこそ最も重要なものである。JOY OF LIFEは、知、情、意の総合が前提となるからである。

参 考 文 献

- 1) 今道友信、「愛について」、講談社現代新書
- 2) 今道友信、橋本典子、「美の本質と様態」、日本放送出版協会
- 3) 渡辺和子、「心に愛がなければ」、PHP研究所
- 4) 有馬朗人、関本忠弘、「大学の役割、企業の役割」、季刊開銀 第19号、日本開発銀行 企画部
情報企画室
- 5) 学術国際局、研究助成課研究協力室、「大学と産業界等との研究協力について」、文部省資料
- 6) 水野博之、「企業から見た大学」、文部省資料
- 7) 河合隼雄、「新しい教育と文化の探求」、創元社
- 8) 西部 邁、「新学問論」、講談社現代新書
- 9) 西尾幹二、「日本の教育、智恵と矛盾」、中央公論社
- 10) 通産省機械情報産業局新映像産業室編、「人間情報社会の実現に向けて」、(財)通商産業調査会
- 11) 西山千明、「第4の選択 (I、II)」、PHP文庫
- 12) ルドルフ・シュタイナー、「教育の根底を支える精神的・心意的な諸力」人智学出版社
- 13) 安岡正篤、「運命を創る」、「運命を開く」、「論語の活学」、「人物を創る」、「知命と立命」、プレジデント社
- 14) 守屋洋、新釈「伝習録」現代陽明学入門、PHP文庫
- 15) フランシス・フクヤマ、渡部昇一訳、「歴史の終わり (上、下)」、三笠書房
- 16) 土居健郎、「甘えの構造」、弘文堂
- 17) 〃 、「表と裏」、弘文堂
- 18) 小此木啓吾、「モラトリウム人間の時代」、中公叢書
- 19) 桑原武夫編、「創造的市民講座」、小学館
- 20) スティーヴン・W・ホーキング、監訳 佐藤勝彦、「ホーキングの最新宇宙論、ブラックホールからベビーユニバースへ」、日本放送出版協会
- 21) 松井孝典、「地球・宇宙そして人間」、徳間書店
- 22) 〃 、「水惑星はなぜ生まれたか」、ブルーバックス、講談社
- 23) ノバート・ウィーナー、池原止戈夫訳、「人間機械論」、みすず書房
- 24) 湯浅精二著、「生命150億年の旅」、新日本新書
- 25) 和田純夫、「もっとわかる宇宙論」、日本実業出版社
- 26) 金子隆一、「もっとわかる進化論」、日本実業出版社
- 27) 浅間一男、「ダーウィン進化論を解体する」、光文社

- 28) 合田周平、「地球時計を読む」、徳間書店
- 29) 加藤尚武、「環境倫理学のすすめ」、丸善ライブラリー
- 30) M・アイゲン、R・ヴィンクラー、寺本英、伊勢典夫ほか訳、「自然と遊^{ゲーム}戯」、東京化学同人
- 31) 佐倉統、「現代思想としての環境問題、脳と遺伝子の共生」、中公新書
- 32) 竹内靖雄、「経済倫理学のすすめ」、中公新書
- 33) 増田永二、「情報経済学」、産業能率短期大学出版部
- 34) 石井威望、「ニューハード文明論」、PHP研究所
- 35) 入江隆則、「日本がつくる新文明」、講談社
- 36) 永井了吉、「科学から宗教へ」、学芸書林
- 37) アーノルド・ミッチェル、ジェームズ・オグルビー、ピーターシュウォーツ、吉福伸逸監訳、「パラダイム・シフト」、TBSブリタニカ
- 38) コンラート・ローレンス、日高、久保、訳、「攻撃、悪の自然誌」、みすず書房
- 39) クロード・レヴィ＝ストロース、大橋保夫訳、「野性の思考」、みすず書房
- 40) 永安幸正、「経済学のコスモロジー」、新評論
- 41) ホセ・オルテガ・イ・ガセット、池島重信訳、「現代の課題」、法政大学出版局
- 42) C・G・ユング著、松代洋一編訳、「ユングの文明論」、思索社
- 43) 佐藤文隆、「宇宙論への招待」、プリンキピアとビッグバン、岩波新書
- 44) 村上陽一郎、「宇宙像の変遷」、日本放送出版協会
- 45) アーノルド・トインビー、深瀬基寛訳、「試練に立つ文明」、社会思想社
- 46) O・シュペングラー、村松正俊訳、「西洋の没落（I、II）」、五月書房
- 47) マックス・ウェーバー、出口勇蔵編、「ウェーバー、世界の思想家21」、平凡社
- 48) 広川洋一、「ギリシア人の教育」、岩波新書
- 49) 梅原 猛、「文明への問い」、「日常の思想」、集英社文庫
- 50) 遠藤周作、「こころの不思議、神の領域」、PHP研究所
- 51) 真継伸彦、「心の三つの泉」、河出書房新社
- 52) 深谷昌志、「日本の教育」、日本放送出版協会
- 53) 瀬沼克彰、「生涯学習と企業および行政の役割」、ダイヤモンド社
- 54) 色摩力夫、「オルテガ」、中公新書
- 55) プラトン著、久保勉訳、「饗宴」、岩波文庫
- 56) シュプラランガー、浜田正秀訳、「教育者の道」、玉川大学出版部
- 57) 石川松太郎、「教育の歴史、日本における教育の歩みを中心に」、日本放送出版協会
- 58) 市川浩、山口昌男編、「身体論とパフォーマンス」、学燈社
- 59) ホイジンガ、高橋英夫訳、「ホモ・ルーデンス」、中公文庫

- 60) R・カイヨワ、清水幾太郎、霧生和夫訳、「遊びと人間」、岩波書店
- 61) カール・ディーム、福岡孝行訳、「スポーツの本質と基礎」、法政大学出版局
- 62) ドイツ・スポーツ連合、「スポーツの将来」、クラウド・ハイネマン（ハンブルク）、ハートムート・ベッカー（フランクフルト）
- 63) 福岡孝純、「スポーツ・ビジネス」、日本経済新聞社
- 64) 福岡スポーツ研究所、日本システム開発研究所、「21世紀を目指したスポーツ・健康づくり活動に関する調査研究報告書」、(財)日本システム開発研究所
- 65) ユルゲン・パルム、「スポーツクラブの意義と役割」他、ドイツスポーツ連合
- 66) ミヒヤエル・エンデ他、丘沢静也訳、「オリーブの森で語りあう」、岩波書店
- 67) 西郷信綱著、「古事記の世界」、岩波新書
- 68) 西郷、永積、広末、「日本文学の古典」、岩波新書
- 69) 世阿弥、「風姿花伝」、岩波文庫
- 70) 竹内敏晴、「からだ・演劇・教育」、岩波新書
- 71) 山口一孝、「六十年の登行と滑降」(仰)啓陽社
- 72) サン・テクジュベリ、内藤濯訳、「星の王子さま」、岩波書店
- 73) 宮沢賢治、「銀河鉄道の夜」、岩波書店
- 74) 小笠原清信、「日本の礼法」、講談社
- 75) ピエール・ド・クーベルタン、カールディーム編、大島鎌吉訳、「オリンピックの回想」、ベースボールマガジン社
- 76) 子安宣邦、「本居宣長」、岩波新書
- 77) 勝部真長、「和辻倫理学ノート」、東京書籍
- 78) 多田政一、「二十一世紀への健康法」、YON・I クラブ
- 79) 新渡戸稲造、矢内原忠雄訳、「武士道」、岩波文庫
- 80) 山岡鉄舟（談）、勝海舟（評論）、勝部真長編、「武士道」、角川選書
- 81) ラフカディオ・ハーン、平井呈一訳、「心」、岩波文庫
- 82) エーリッヒ・ノイマン、氏原寛、野村美紀子訳、「芸術と創造的無意識」、創元社
- 83) 平田精耕、「活人禅」、PHP文庫
- 84) 渡部昇一、「日本史から見た日本人（古代編）」、祥伝社
- 85) 今道友信、「美について」、講談社現代新書

誤	正																																																																	
頁 61下より 3行目 拈出する	捻出する																																																																	
頁 62 14行目 である。ゼオスフェア	であるゼオスフェア																																																																	
頁 63 21行目 Wisdom	wisdom																																																																	
頁 64下より 11行目 理	置																																																																	
頁 68 12行目 遊戯スポーツ	遊戯・スポーツ																																																																	
頁 48 <table border="1"><tr><td></td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td>32</td><td>33</td><td></td></tr><tr><td>A (T.S.)</td><td>,</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>B (A.U.)</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>↑</td><td></td></tr><tr><td>C (T.S.)</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>↑</td><td></td></tr><tr><td>D (T.F.)</td><td></td><td></td><td>6</td><td>,</td><td></td><td></td></tr></table>		29	30	31	32	33		A (T.S.)	,						B (A.U.)					↑		C (T.S.)					↑		D (T.F.)			6	,			<table border="1"><tr><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td>32</td><td>33</td><td></td></tr><tr><td>,</td><td>↓</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td>↓</td><td></td><td></td><td>↑</td><td></td></tr><tr><td></td><td>↓</td><td></td><td></td><td>↑</td><td></td></tr><tr><td></td><td>↓</td><td>6</td><td>,</td><td></td><td></td></tr></table>	29	30	31	32	33		,	↓						↓			↑			↓			↑			↓	6	,		
	29	30	31	32	33																																																													
A (T.S.)	,																																																																	
B (A.U.)					↑																																																													
C (T.S.)					↑																																																													
D (T.F.)			6	,																																																														
29	30	31	32	33																																																														
,	↓																																																																	
	↓			↑																																																														
	↓			↑																																																														
	↓	6	,																																																															